発行人　金沢真宗学院
代表者　小林　斉
金沢市安江町15-52
金沢教務所内
電話　076-265-5191

震動

第23号

「問い」を通して出遇う

黒川智光

声明作法や教学にほとんど触れたことのない私が金沢真宗学院に入学させていただいたのが二十数年前のことである。昼は法務・夜は学院生という生活が始まってすぐに、自坊にて蓮如上人の五百回御遠忌法要が厳修されることになった。何度か準備の打合せに参加させていただきましたが、専門用語が飛び交い何も分からないまま、ただ聞いているのが精一杯、法要が始まっても指示されるままに動いているうちに終ってしまったのが、私にとっての初めての御遠忌法要である。だが、ただ終ってしまったように思えた御遠忌法要であったが、一つだけ心に残っているものがある。それは、「いつか私もこのような御遠忌法要を住職として勤めなければならない日がやってくるのだろう。」という思いである。今になって考えてみるとこの時の思いが学院生活はもちろん、今も私の一つの指針になっているように思える。

将来、御遠忌法要を勤めるには、「今、自分は何をすべきか」という問いに対し、三年間「聞く」ことに専念しようと思い、授業に臨むこととした。もちろん、月参りやご法事で門徒さんとお話する時も「聞く」ことを意識した。裏を返せば、ただ単に、私の方からお話できることなど何も持ち合わせていなかったということでもある。そしてこれには、自分自身の「問い」を掘り起こすという意図があった。つまり、自分自身のこれからの課題を探すことが必要だったのである。しかし、はからずも門徒さんが「僧侶としての私に願っていること」、「お寺に願っていること」を確認する大切な機会にもなった。

これまでの学生生活では「答え」を求めることが第一義であり、そのことに染まりきっていたため、はじめは、聞けば聞くほど「問い」ばかりが増えることに不安になることもあったが、学院の授業を通して、「問い」を持つことの大切さに気づかされた。また、ともに学ぶ仲間や指導の方々との出遇いが大きな励ましとなった。

「問い」を持つことで関心が湧き、今まで何気なく聞いていた言葉がこれまでと全く違った響きで聞こえてくる。これは、無関心・他人事・知識として聞き流していたことが、「問い」を持つことで自分の身を通して頷くことができたからであろう。

「問い」を通した出遇いは人を歩ましめる力を持っている。これからもこの姿勢は大切にしていきたいと思う。

学院を卒業後、教師資格を持つことで「聞く」ことだけでなく、「聞かれる」ことも多くなってくる。

現に今、学院においては生徒ではなく、指導として「聞いたこと」を伝えることになっている。

今回、この原稿を書かせていただいたのは「伝えることの難しさ」という課題に直面している私が、今一度、自分自身が学院に入学した頃の記憶を思い起こすことで、改めて当時の自分の「問い」に出遇い直そうという思いがあったからである。そして、私にとって真宗学院は「問い」を通して出遇う大切な場であったと再確認ができた。

聞いたことの重み、そしてそれを「伝える」ことの責任が教師としての私に今、願われていることではないだろうか。「如是我聞」、「自信教人信」という言葉が今、私に響いている。

金沢真宗学院特別講義

「宿業と運命」―『涅槃経』と『観経』から

中村　薫師

《宿業と運命》

『観無量寿経』と『涅槃経』を通しながら、運命ということと宿業ということについてお話しさせていただきます。

真宗学院からいただいた課題が運命と宿業ということでした。これが同じなのか違うのか、宿業、運命というのがどういうふうに使われているのかという事があります。

宿業という言葉を親鸞聖人はあまり使っておられませんが、『歎異抄』の中に出てまいります。宿というのは、そこに宿るという意味です。他には宿縁。『教行信証』の中に「遠く宿縁を慶べ」という形で出てまいります。

運命という場合には、もう一つ宿命というのが出てまいります。「宿命的な出会い」のような宿命。また、天命という言葉もあります。この命というのは、いのちというよりも勅命という命令的なものです。「本願召喚の勅命」という言葉もあります。また、前世から定まっている運命的なもの、前世から定まっていると捉えられていることを運命と呼びます。そこで、この運命というのはどういうことか。運というのは動くということです。展開していくということです。だから、これも運命だったかと、その時で感じることです。

ことわざに「人事を尽くして天命を待つ」という言葉があります。これを、清沢満之先生はひっくり返し「天命に安んじて人事を尽くす」と言いました。微妙に違いますが、まったく生き方が変わってきます。やることだけはやったけど、後は任せたということではなく、天命全てはもうあるがまま、なすがままで任せたということです。私は、できることを尽くしていきますという転換です。そうすると、自力無功と他力の世界です。ただ私たちは自力と他力を分けて考えてしまうことが多いのではないでしょうか。それは自力だから駄目だ、これは他力だろうと。しかし、そうではなくて自力無功、自力を安心して尽くせるのが他力の世界だというのです。一方に自力があって、他方に他力があるのではなくて、安心して自力を尽くしていくことの出来る世界です。

宮城顗先生がよくおっしゃっていたのは「努力も他力のうちです」ということです。私たちは、もっと努力しろと、努力は自力のように思うけれども、努力できたというのは、大いなるはたらきの中でできたのだと。「努力も他力のはたらきです」と言われるのです。つまり、私たちは相対的に分けて考えるけれども、そうではなくて、これから申し上げていく『涅槃経』の中の話ですと、宿業とは、決して諦め的なことではありません。しかしこれまで説かれてきた中では差別的な形で説かれてきました。いろんな身分差別等を受けていく中に、「それは前世の因縁でそうなったのだから、宿業として諦めなさい」と言う人がありますが、それは間違いです。宿業というのは、どこまでも自覚の言葉です。もう一つ余談ですけれども、四諦八正道がありますが、諦めというのは明らかに見ることです。だから、諦めに違いありませんけど、宿業というのは、どこまでも自覚をして生きるということです。

諦めて放棄してしまうのが宿業ではなくて、宿業は、どこまでも受け止めていくものです。ただし、この命と業が、どう違ってくるか。一つ厄介なの

真宗学院を卒業して

卒業式の様子（2015年3月27日）

大円　久基

僕の車のナンバーは『７７６６』だ。社会人になってはじめて買った車のナンバーがそれだったために、以来、車を買い換えるたびに『７７６６』にしている。ある時、学院のクラスメイトが僕の車を見て、「ナム（南無）だ。」と言った。７→ナ、６→ムという語呂合わせだが、そんなことを言われたのは初めてで、僕自身、車に乗って２０年以上もたつが思ってもみなかった。「南無阿弥陀仏」の車に乗っているか

がカルマの問題です。カルマはインドの言葉で、日本の言葉で言ったら行為ですから、行為の中には、善いことも悪いこともあります。

《善因善果・悪因悪果》

仏教の基本的な事柄の中で、善因善果、悪因悪果という言葉があります。善いことをすれば、善いことがあり、悪いことをすれば、悪いことがある、そういう報いがあるという意味です。今の新々宗教、新興宗教も含めて、善を積みなさいと言います。ところが親鸞は、「煩悩具足の凡夫のわが身」と、自分自身が悪と言っているのです。つまり、倫理・道徳的な話ではなくて、生きているそのことが、罪を背負って生きているのだと言うのです。魚でも肉でも、もとはいのちがあったものです。それを人に殺させておいて、平気で美味しいとか、まずいとか勝手に言っている。そういう生き方を無自覚なる罪と言います。

そこで、善因善果、悪因悪果と、これだけだと分かりやすいのですが、人間は、そうはいかないのです。善因悪果ということもあるのです。悪因善果ということもあるのです。例えば、三國連太郎さんは映画関係の失敗やら、離婚やら、いろんなことが続きました。そんな大変な時にインドへ行かれたのです。そして、インドから帰る時、日本に帰る心が定まらず、うそをついて飛行機をキャンセルし、アフガニスタンの方へ向かったのです。それがもとで『白い道』という親鸞の半生を描く映画を作ったのです。そして、たまたま乗って帰ってくるはずの飛行機がベンガル湾に落ちたのです。自分はうそをついて悪いことをしたけれども、いのちは助かった。悪いことをしたら悪い報いを受けるかと思ったら、いのちが助かったということがあるのです。そういう悪因善果ということもある。それから善因悪果ということもあるのです。親切に友達を車に乗せて駅まで送ってあげようとして事故を起こして、自分は無傷で、友達が死んでしまったらどうなります。善いことをしたのに悪い結果だってあるのです。そういう意味で、必ずしも運命などというものは定まっていない、揺れているのです。もう一つ、お釈迦さまは善でもない、悪でもない「無覆無記（むふくむき）」といわれた。つまり、善悪の執着について語られなかった。そういう意味で考えてみると、過去の行為が結果として表れる、つまり因縁果です。これが実は道理なのです。後から出てきますけど、この道理から外れるのを外道と言うのです。身の事実、現実から外れていくことを外道といいます。

《王舎城の悲劇》

これから『観経』と『涅槃経』について、その因縁をお話し申し上げるのですが、その前に『涅槃経』の中で阿闍世が悩み苦しんでいく所で六師外道が出てきます。身の事実から逃げて言い訳と弁解をしていくのです。慰め的言い訳と弁解なのです。因果の道理から外れようが何をしようが、言い訳と弁解で自分を正当化していこうとする立場を六師外道というのです。そういう人がいるという話ではなくて、私たちは全部そういう生き方をしているということです。それの基本的な形で出てきたのが韋提希という人です。

そこで、誰に、どういう罪があるのか、そこら辺を考えながら聞いていただきますけれども、どうして『王舎城の悲劇』が起きてきたのでしょうか。

これは善導大師が『観経疏』の中で詳しく述べておられます。頻婆娑羅王と韋提希夫人の間にはお子さまが授からなかった。ところが、当時国というのは世継ぎ、跡継ぎがないと滅ぼされてしまうことが多く、そのことは大事な課題になっていました。二人には子どもが授からず、占い師に占ってもらうと、山で修行している仙人が三年後に亡くなって、あなたの子どもとなって生まれると予言しました。歳の若くら3年間無事故で学院に通えたのだ…。というのは冗談だが、学院に通っている間、そういった、仏教があふれた会話が素直に楽しかった。卒業してそういう場所が無くなった今感じるのは、普段の生活の中の様々な場面で、真宗の教えや親鸞聖人の言葉を確かめたい、求めたいと思っている自分に、知らないうちになっていたということ。

「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもって、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします。」やはり親鸞聖人の言葉はこの身に響く。この春、学院卒業と同じくして職場も変わった。仕事はもちろん生活や人間関係も大きく変化した。正直、なかなかしんどい。いちばんやっかいなのは僕の中の自己中だ。人と合わせるために上辺だけ装ってはいるが、心の中は自分中心、我が身だけ。自分を高めたいと思って入学した真宗学院だが、卒業したら真逆で、嫌な自分がどんどん目に付く。まんまとやられた感じだ。はずかしながら僕は、学院を卒業してはじめて毎朝仏様に手を合わすようになった。学院に通っているときもそうしていなかった。でも今、正面から向き合えるのは「南無阿弥陀仏」だけだ。そう『7766』だ。

ない王は三年の月日が待てず、仙人にすぐ死んでくれないかと頼むのですが仙人は拒否しました。すると、家来が仙人を殺してしまうのです。その時仙人が、「今度生まれ変わったら、おまえを殺さずにはおかんぞ」と言って死んだというのです。そして偶然にも韋提希夫人が身ごもります。まさに宿業の業です。「今度生まれ変わったら、おまえを必ず殺すぞ」と言って死んでいった仙人の顔が焼き付いている。そこで国王は韋提希に、「この子を産み落とし殺してくれ」と頼むのです。韋提希夫人は親としては苦しいけれども、王様の言うことは絶対という社会に生きている人間ですので、王様の言うことを聞いて高い塔の上から落としてしまうのです。しかし子どもは小指を怪我しただけで助かった。その後成長した阿闍世は、お釈迦さまのいとこである提婆達多を友人とし、尊敬し信頼していきます。しかしその提婆達多が謀反（むほん）を起こすのです。提婆達多は才能があるのですが、どうしてもお釈迦さまにかなわないので、お釈迦さまを殺して天下を取ろうと企てます。「あなたは、父、頻婆娑羅を殺しなさい。なぜかといえば、おまえの指を見せてごらん。その指が曲がったのは、お父さんお母さんが、あなたを殺そうとしたからだ」とそそのかすのです。

阿闍世は逆上し父を七重の牢屋に閉じ込めてしまうのです。韋提希夫人は、間に入って夫と子どもの中で苦しみ、体をきれいに洗い、蜜とかバター等を塗って面会に行き、そして頻婆娑羅王は韋提希の体をなめることによって最小限の栄養をもって生きていたのです。ところがその事が見つかり、とうとう韋提希夫人も殺されそうになった時に、月光という家来が、「いまだかつて、父親を殺して天下を取った人は一万八千人もいるけれども母親を殺して天下を取った人は一人もいない、もはや、あなたは人間でない、母を殺すなら、われわれは家来としてあなたに付いていけない」というのです。さすがに阿闍世は、そこでとどまって、お母さんを牢屋に閉じ込めてしまうのです。そういうところから『観経』が説き起こされてきました。

《観経の原点》

そこで『観経』が説き起こされてきたところを少し見ていきます。『仏説観無量寿経』の最初のところを注意してください。

「如是我聞　一時仏　在王舎城　耆闍崛山中」とあります。ここに「王舎城耆闍崛山の中にましまして」とあります。『観経』が説かれたのは耆闍崛山の中の王舎城の中なのです。それに対して『大経』は、「我聞如是　一時仏　住王舎城　耆闍崛山中」とあります。ここでは「住王舎城」と王舎城に住しているのです。中にありて在。これを私たちの先輩が注意しておられるのは、在と住です。『法華経』も耆闍崛山中の住なのです。『大経』も『法華経』も住だけれども、『観経』だけが在。在というのは、滞在するとか、ちょっとそこにいるということで、住というのは、そこに住んで、ずっといることです。在と住は違うでしょう。ここで注意していただきたいのは、『観経』が説かれたのは韋提希一人の救済なのです。ところが仏法はどうかというと一切衆生なのです。そして同じ場所で『法華経』『大無量寿経』を説いているのですけれども、これは一切衆生の救済が目当てです。『法華経』なら法華一乗です。その説いているお経を途中で中座し、そして王舎城へやってきて説かれたのが『観無量寿経』なのです。

『観無量寿経』が説かれてきた因縁が、一切衆生を含みながら、あなた一人。そして韋提希を凡夫の往生。修行をして偉くなって往生するのではなくて、家庭問題に悩み苦しんでいる韋提希を救わなければならない。韋提希夫人の救済こそが『観経』の原点なのです。

もちろん四十八願の願行も法華一乗も大事なのだけれども、今ここで悩ん

熊谷　裕恵

『卒業して感じたこと』というテーマを頂き、正直困惑している。というのも、在学中、卒業生から「教師資格をとっても何も変わらんよ。」と言われていた、その通りの状態であったからである。

取りあえず、六年前に発足した新教師研修会なるものに参加して考えてみようと思った。この会は、大学や学院を卒業した新教師に仲間を作ってほしいという願いのもと発足されたと説明を受けた。一時間の講師の話を聞き懇親会が開かれた。会の主旨を受け懇親を深めるための話として、講師の竹内先生（学院卒業九年目）は、高光大船師の『僧侶とは手本でなく見本でいい』という言葉を述べ、研修会の歩みとご自分の現在までの歩みとご門徒との関わりの体験の例を語られた。

因みにこの会に参加した同期は三人。懇親会はそのうち二人。

寺に従事し仕事としての環境が整った方の話は、正直自分とは別世界の話に思える。つまり、在家や法務がない者で教師の資格を取得した者には、意欲と裏腹に現実が伴わない。学びを求めたところで、ただの自己満足に過ぎないのではないかとよく思う。だからと言って、内にこもって学びや交流の場に出ないというのではもともこもない。日々の生活に追われていることを

でいる人を救わなければ、まったく意味がないのではないかという事で説かれてきたのが『観無量寿経』です。

《阿闍世の闇》

皆さんに考えて頂きたいのは、阿闍世というのはどういう立場になるのか。確かに父親を殺したことは悪いことでしょう。罪です。しかし、どういう因縁で、そういうふうになったのでしょう。ここが私たちの原点なのです。

そこには何一つ選べない現実があります。自由が利くと思っているけれども、私たちがいのちをいただいた原点は何一つ選べなかったのです。親を選んで生まれてきた人はありますか。気が付いたら、この人がお父さんであり、お母さんであった縁をいただいているのでしょう。

私たちのこころの悩みもいろいろあると思います。例えば、男、女を選んで生まれてきた人がありますか。気が付いたら男であり、気が付いたら女である。だけど、そんな中で、男に生まれたけど女になりたいという人もいるかもしれません。しかし、何一つ選べずに生まれてきます。

環境もそうでしょう。皆さんの中で、お寺に生まれた方があるかもしれません。私はお寺に生まれましたけど、寺にさえ生まれなければ自由が利いたのにと恨んだ時期もありました。でも選べなかったのが現実です。

国家、民族もそうでしょう。日本人を選んで生まれてきた人はありますか。日本を選んで生まれてきた人はありますか。たまたま生まれてきたのが日本であり、日本人であった現実の中で生きていくのです。

阿闍世はどうですか。たまたま王の子として生まれてきたけれども、お父さん、お母さんの因縁のもとでしょう。自分がしてきた行為・宿業でしょう。してきた行為を、そのまま引きずっている。そして自分も、その親から生まれたことを引きずっているのです。

けれども、縁で助かったのです。助かってよかったと思ったら今度は、個人を超えて社会的環境の中から提婆達多という一人が出てきて、そそのかしてきたのです。それで逆上して、お父さんを殺してしまう行為に走ってしまった。これが『観無量寿経』の説き起こされてきた機縁です。

《韋提希の愚痴》

その中で韋提希夫人が「自ら瓔珞を絶ち、身を挙げて地に投ぐ、号泣して仏に向かいて白して申さく」と、とうとう泣き叫びながら言ったのです。何と言ったか。「世尊、我、宿何の罪ありてか、この悪子を生ずる。世尊また何等の因縁ましましてか、提婆達多と共に眷属たる」というのです。これが、人間の出てくる愚痴なのです。ここから出発していくのです。愚痴のないところから人間性は出てこないのです。愚痴がいいとは申しませんけれども、泣き叫びながら、やっと一人の人間になるのです。それまでは世間体で生きてきたのです。国の王后として、母親として、隙のない人間として生きてきたのです。そこから、泣き叫んで身を地に投げ打って「世尊、我、宿何の罪ありてか、この悪子を生ずる」と、とうとう自分の子どもを悪人にしてしまったのです。お釈迦さま、どうして、こんな悪い子を私は産んでしまったのですかと泣き叫ぶのです。

その後、今度は「世尊また、何等の因縁ましましてか、提婆達多と共に眷属たる」のかと、愚痴を言うのです。あなたは私の息子をたぶらかした提婆達多と従兄弟だと聞くじゃありませんか、どういう因縁なのですか。まったく関係ない人がだますならまだしも、お釈迦さまの従兄弟である提婆達多が、こともあろうに私の子どもをたぶらかして、こんな目に遭わせてとありったけの思いを投げかけるのです。そういう苦しみの中で、韋提希が釈尊に救いを求めていくのです。

言い訳に、自分の思い通りに生きている自分に気づく。

お念仏に遇うとは、まず聞法。人との関わりから自分を知ることの繰り返しである。ろくな行も積まずに、仏法の道への出発点にもいまだ立てず、有教師としてこの文章を書く嫌な自分に出会った。

キャンパスレポート

移動研修・西方寺にて（2014年9月7日）

3年生　山本　良平

三年前にご縁がありまして、お寺の娘さんと結婚して入寺することになりました。

『観経』というのは、韋提希一人、凡夫往生を願って説かれてきた経典である。そこに因縁果を成就していく、引き受けていくということです。何でこんな目に遭わなければならないのか、「どうして私が」と愚痴や不平や不満が出るけれども、そこに立っていくのです。それを、お釈迦さまは説いていくのです。お釈迦さまは、もう少し丁寧に言いますと、最初は沈黙して語れなかったのです。韋提希夫人の愚痴のありったけを聞き続けられたのです。

マックス・ピカートという人は、現代社会は騒音の時代であると指摘しています。

ところが、仏陀は沈黙。黙って聞くのです。これを今の心理学の言葉で傾聴といいます。傾けて、そばにいて、その人の心を聞いていくことです。これは大事なことです。そういう中でこの『観経』が説かれてくるということを見てみました。

《覚如上人と蓮如上人の見方》

これから『涅槃経』に入りますが、その前に、どうしてお釈迦さまは『大経』『法華経』を説いていた時に中座し、韋提希の所に来たのでしょうか。今、申し上げました、一切衆生と言いながら、汝一人ということでしょう。覚如上人の書かれた『口伝鈔』の中に、こんな言葉が出てまいります。「いかにいはんや、諸宗出世の本懐とゆるす『法華』において、いまの浄土教は、同味の教なり（※）。『法華』の説時八箇年中に王宮に五逆発現のあいだ、このときにあたりて、霊鷲山の会座を没して、王宮に降臨して、他力をとかれしゆえなり」とあります。

覚如上人は、釈尊が王舎城へやってくる前に説いていたのは『法華経』だと言われています。法華一乗のお経を説いている途中、それを中座してやってきたのだというくだりです。その説いていた『法華経』は、「諸宗出世の本懐とゆるす『法華』において、いま浄土教は、同味の教えなり」とあるように、浄土教と同味の教えだというのです。

もう一点だけ申し上げておきます。『御文』に「むかし釈尊、霊鷲山にましまして、一乗法華の妙典を説かれしとき、提婆・阿闍世の逆害をおこし、釈迦、韋提をして安養を願わしめたまいしによりて、かたじけなくも霊山法華の会座を没して王宮に降臨して、韋提希夫人のために浄土の教をひろめましましによりて、弥陀の本願このときにあたりてさかんなり」とあります。

もちろん、これは、法華と念仏は対立するものではなく、同時性をもっているものですけれども、覚如上人、蓮如上人は、ただ大事なことは、一切衆生の救済を願いながら、今は韋提希一人の救済を目的とするのです。このように同時性をもっていると言うのです。

※ 中国仏教の教相判釈が基本にある。仏陀から説き出された教えは、牛の乳が精製されて、順次に乳味・酪味・生酥味・熟酥味・醍醐味の五味（『涅槃経』「五味相生の喩」）となるように、五つの段階を経て、最上の醍醐のような「経」にきわまるとする。ここでいう醍醐とは、『法華経』と浄土教を指している。

《私一人》

十方衆生、全ての人を救わなければ、われ、仏にならない。それは、その通りなのですけど、そこによく私が抜けてしまうのです。人ごとになってしまうのです。しかし、仏は汝一人、おまえだと。つまり、私のためなのだと。そういう意味では、今日の真宗学院の特別講義は、誰かのためにではなくて私一人。その私一人が開かれてある。誰が来てもいいし、どんな人が来ても聞ける、開かれた場所でありながら、目当ては汝一人という。その矛盾するものが一つになる。これが一つ、大事なことです。

だから、お釈迦さまは『法華経』を

それまでは全くお寺にご縁がなく、お寺に行く時といえば葬儀や法事の時ぐらいでした。

そんな私が抱いていたお寺のイメージは「死」でした。亡くなった先祖を供養するところというイメージです。しかし、真宗学院で学んで、むしろ「生」なのだと知った時はすごく驚きました。

最近、ふとした時に自分を客観的にみて悲しくなることがあります。それは直前の行動だったり、前日のことだったりしますが、「自分本位に考えていたな～」と感じるのです。しかし、同時にそのままでいいのだという風にも思うのです。結局結論は出ずよくわからなくなって、「客観視タイム」は終わります。

真宗の教えを聞いていると、よく「そのままでいいのだ」という声を聞きます。「そのまま」ってなんだろうと考えた時、一年生の頃に「問い」はありますか?と言われたことを思い出しました。その頃は何のことかさっぱりわかりませんでしたが、もしかするとこういう風に考えることが「問い」なのかな？　と最近感じています。

そして、二年生の授業で「悪人正機」について学びました。自分は悪人であると自覚して、その上で「そのまま」の行動を取れるといいのかも知れません。

説いて一切衆生の救われるべき道を説きながらも、今その「時」これが大事だというのです。真理は真理であって、真理は伝えられる人による。また、その時が大事なのです。一瞬一瞬なのです。

『観無量寿経』が説かれてきた背景というのは、どういうことで説かれてきたのか。それは、韋提希一人を救う。その一人が十方衆生につながっているということです。

《阿闍世の病》

阿闍世の子どもが指を切り傷口が膿み、その膿みを吸ってつぼへ吐いていた。それを見た韋提希が阿闍世に話します。「実は、あなたのお父さんも、あなたが血膿みを出して苦しんで泣いている時に、その膿みを吸ってそれを飲み込んで今のあなたと同じことをしていたのだよ」というのです。そのことを聞いて因縁の巡り合わせを初めて感じ、父を助けようとしたが、もう既に亡くなっていた。その事を大変後悔し、病気になっていくのです。体に吹き出物ができ、膿みが出て嫌なにおいがするので、誰も近づかない。ただ韋提希だけはやはり母として、阿闍世の傷ついた体に薬を塗ろうとしているのです。そのときに阿闍世が「この私の傷は、実は心の傷がこういう体にしているのです」というのです。それで六師外道という人を連れてきて、心のケアをし、それをどう癒していくのか、そのときの状況描写が『涅槃経』の中にあります。

《身の事実》

人間の身と心は一つです。切り離せない。ただし、仏教は必ず身が最初に来ているのです。心身症という病気は心が先なのです。お医者さんが分からないのは、心なのです。体はデータで、この人はこういう病気で、身体はどうなるかだいたい分かってくる。ところが仏教は、心の操作ではなくて身の事実なのです。身の事実に立つといいます。特に親鸞聖人は「弘誓の仏地に樹て」という時、〝樹〟という字を書かれるのです。これには意味があります。木というのは見えない根っこによって大地に支えられている。必ず根を張っている。見えないものによっていのちが支えられているのが木です。私たちは木の上しか見えない。けれども、木は大地に根差して立っている。だから、身の事実に樹つ。そのままということです。だから仏教は、心の操作ではないのです。『涅槃経』では六師外道。外道というのは因果の道理から外れる事です。言い訳と弁解ばかりし、心の操作をしているだけなのです。いくら心の操作をされても人間は安心できないのです。身の事実に樹つこと以外は救われないのです。

私たちの思いは落ちるのが嫌で、救われたいと上ばかり見ていくのです。そして私たちが落ち着かないのは、大地に足が着いておらずふらふらしている。そのふらふらしているのを幽霊というのです。狩野派の絵に、幽霊が出てきます。過去、未来、現在、どこにも拠り所が見いだせない悩める人間の生き方を幽霊といいます。幽霊というのは決まって手を前に出し「恨めしや」と言う。そして髪の毛がすっと後ろに下がり、すっと出てくると足がないのです。今日までの人生を悔いなく満足していますか。あの時ああして、この時こうすればよかったと、いのちがさまよっているのです。これが、私たちの生き方なのでしょう。

一般の家からお寺へ来られた方で、姑にいじめられたわけではないのですが、「おみゃあさんは寺のことは分からんで、向こうへ行っとれ」と言われたことがあったそうです。その言葉が忘れられず、おばあちゃんが年をとられ亡くなっていく時でも、許せなかった。今でも許せないと。あの時言われたあの言葉、ずっと忘れないというのが人間の執念、思い込みです。これは

最後になりましたが、この真宗学院で出会った皆さんは、大切な仲間だと思っています。

『教行信証』の総序に、「遠く宿縁を慶べ」とあります。入学前の縁、在学中の縁、そしてこれからの縁。その中で良い縁もあればそうでない縁もあるかも知れません。でも、そんな縁を話し合える仲間にこの真宗学院で出会うことが出来ました。

そんな仲間とこれからも、ともに学んでいきたいと思っています。

3年生　萩原　文子

何をやっても長続きせず、どうしようもない私に、日課にしていることが一つあります。それは、毎朝六時に鐘を撞くことです。南無阿弥陀仏を称え、仏様が見守ってくださることに感謝し、祈りながら鐘を撞きます。鐘の音は毎日、一打一打違います、その響きを聞いているうちに、自分の心が澄んでいき、落ち着いた心持になるのがわかります。

鐘を撞いた後、三十分程度散歩に出ます。行先は大海川沿いの田んぼ道。近くの宝達山から朝日が昇り、その姿が水田の水面に映える美しいコースです。その道を歩いていると、いろいろなことが頭をよぎります。日々の出来事やその日の献立、家族のこと、そし

過去にとらわれて愚痴や不平や不満を言っている私です。そして、未来に対して夢と希望が持てないのです。経済で生きてきたけれども、年金を削られて、将来的に夢も希望もなくなってきてしまう社会です。現在に拠り所が見いだせない、生きがいが見いだせない。そういう生き方を幽霊というのです。

清沢満之先生は「任運に乗托して落在せるもの、これなり」と語ります。落ちるということが大事なわけです。落ちて心配しない、大丈夫という世界です。

安田理深先生の家が火事になり自分の家が全部焼けてしまったのです。世界で2冊か3冊しかないドイツ語の辞典も焼けてしまった。そういう中で先生がおっしゃったのは、「責任は隣の家にあるかもしれない。しかし、火の出た家の隣に私の家があったという存在的責任は逃れられないでしょう」といわれました。つまり、火の出た家の隣に私の家があったという事実、それは悔やみます。しかし「落在せるもの、これなり」というのは、存在的責任を担う。どんなに苦しい目に遭おうが、そこに樹つ。これは大事なことではないでしょうか。

九州の寺本玄洞先生は「逃げたら暗い、引き受けたら明るい」とおっしゃいました。私たちは物事から逃げたり、嫌なことから逃げたりしている。逃げている間は暗く追いかけてくる。引き受けたら明るい。身の事実を受けていくのです。つらく悲しい出来事でも引き受けていくのです。

金子大栄先生は「病気になったら病人になりなさい」とおっしゃいました。病気と病人とは違う。私たちは気が病んでしまう。「あなたは、がんですよ、あと半年です」と言われると、「そうか、それなら今日は酒でも飲んでいこうか」というわけにいかない。聞いた瞬間から気が病んでいくのです。病人になれないのです。病人になるということは、身に任せるということです。身の事実に任せるのです。

これも、なるほどと思って聞いたのですが、安田理深先生が六十過ぎになって結核が再発して鞍馬口病院に入院された。結核は絶対安静にすることが大事です。ところが先生が入院してみたら、孫のような若い看護師さんが「はい、おじいちゃん。五時になったら体温を測って、六時になったら食事。九時には寝ますよ」と、うるさくて仕方ない。安静にならない、いらいらするというのです。先生は、とうとう婦長さんを呼んで聞いたというのです。「あんたら、安静、安静と言うが、どうすることが安静なのだ」と言ったら、その婦長さんが一言、「そういうことを考えんことを安静と言うのです」といわれた。それからは、五時になると、はいと手が出るようになる。そうすると楽になったと。身に任せていく、身の事実に任せていくということですね。

《名医耆婆》

『涅槃経』が説かれていく中で、最後に出てきたのが耆婆というお医者さんです。

人間というのは同情や哀れみも大事ですが、同情や哀れみでは救われないのです。親鸞聖人も「慈悲に聖道・浄土のかわりめあり」といわれるのである。聖道の慈悲は、ものを哀れみ育むことです。しかれども存知のごとく助け難ければ始終ありません。しかるに浄土の慈悲のみすえとおりたるということをおっしゃっている。

て自分のこと。私は本当に真宗を信仰してるのだろうか、こんな私でも見捨てずに救ってくださるのだろうかとか、とりとめもないことを考えます。

そんなある日、我が家にずっとかけてある数年前のカレンダーのことばが目に入りました。そこには、

いま　光が
　とどいたのではない
光に遇わなかっただけだ
　　吉岡妙子

と書かれてあったのです。私は衝撃を受け、はたと気づきました。そうか、私が信じて念仏を称える称えないにかかわらず、ずっと前から仏様はこんな私を照らし続けてくださっていたのだと。全部お分かりなのだと。それでも見捨てず、変わらず照らしてくださるのだと。私はありがたいと思いました。そして温もりを感じ、心が安らかになりました。このまま生きていっていいのだと。

2年生　舘　朋子

学院に通うようになり、一年が過ぎました。最初はとにかくいろんなことを教えていただき、勉強し、頭に入れて知識を身につけたい。それだけで通っていました。

講師の先生方の授業はとても楽しい話ばかりでしたが、ふと立ち止まって

ここで耆婆が言うのです。「国王よ、慙愧あるのみ」。

「二つの白法あり、よく衆生を救く」。衆生を救いますよと。「一つには慙、二つには愧なり。慙は、みづから罪をつくらず」という。してしまったことは戻れないけれども、自ら罪を作らないということは大事なことでしょう。

「愧は、他を教えて作さしめず」。自分が手を下さずして人にさせる、これもとんでもない罪です。「慙は、内に自ら羞恥す」という。恥ずかしいこころを持つ。「愧は、発露して人に向かう」。自分の願いを持って向かっていく。「慙は、人に羞ず、愧は、天に羞ず」。恥じらいがなくなったら人間性が欠落してきますね。「天に羞ず」、「お天道さまが見てござる。お天道さまに申し訳ない」という。「これを慙愧と名づく。無慙愧は、名づけて人とせず、名づけて畜生とす」という。人間の姿を持っているけど、それは畜生だというのです。

「慙愧あるがゆえに、すなわちよく父母・師長を恭敬す」。これが今の時代、欠落してしまったのです。難しいことは言わない、ただお父さん、お母さん、先生やお年寄りを敬い、尊敬しなさいと。そうすると何か、倫理・道徳的な形で捉えてしまいますが、仏教は倫理・道徳を超えていくべきものでありますが、倫理・道徳を無視はしていません。その執着から解放されなければいけませんが、倫理・道徳は大事です。そういう意味では、お父さん、お母さん、先生、あるいはお年寄りを恭敬し、「慙愧あるがゆえに、父母・兄弟・姉妹あることを説く」と説かれているのです。

ご門徒の家で、お父さんが亡くなった後、途端に遺産相続でけんかになり、四十九日にも集まらないという出来事がありました。縁を頂いて兄弟になり、仲良くすればいいものを、相続の関係でけんかしてしまう。『大無量寿経』の中にそのことが細かく出てまいります。「三毒五悪段」の中に出てまいりますけれども、「父母・兄弟・姉妹あることを」と、これは慙愧が大事だというのです。

「善いかな大王、具に慙愧ありと」と説くのです。そうすると、私のような者でも救ってもらえるだろうかと言うけれども、大丈夫ですというのです。仏さまは大良医なのだと。如来は大良医、名医だというのです。

《阿闍世のために涅槃に入らず》

そして、六師外道の話をずっと聞いた後、お釈迦さまは、今度は阿闍世のために涅槃に入らないというのです。お釈迦さまは無住処涅槃といって、真実に目覚めて、もうそれで私のいのちを終わっていくという大般涅槃に入るのですが、阿闍世のために入らない、まだ仕事が残っているというのです。

これも韋提希一人と同じように、阿闍世のために私は涅槃に入らない、阿闍世一人を救わなければ涅槃に入れないのだといわれるのです。これが仏教なのです。百人のうち九十九人が救われればよいというのではないのです。千人のうち九九九人が救われれば、一人ぐらいはいいだろうというのではないのです。百人が百人、千人が千人、皆、共に救われなければ、われ、仏にはならないというのです。

人間というのは、やっかいで、有吉佐和子の『複合汚染』という小説を読んでいますと、カドミウムに汚染されたお米をどうするかという問題に対し、厚生労働省の人が「アジアの貧しい国に分けてあげればいいでしょう、そのうち一人や二人、病人が出ようが、何万人の人が助かればいいでしょう」と言ったそうです。

小出裕章さんは京都大学の原子力工学の先生で原子力発電に反対している人ですが、科学者として原子力発電所はまだ安全でないと、放射能の問題がまだ残っているから気をつけなければ駄目だと言い続けた方です。「子どもたちにカドミウムに汚染されたコメを食べさせるよりも、私が甘んじてそれ

みると、勉強でもなく、いろんな知識の答えを教えていただいているのでもないような感じで、その思いが日ごとに増していきました。そして、全てが自分への問いになって私に返ってきたのです。毎日、どれだけの問いを持って家路に就いたことでしょう。解決することもなく悩みました。

自分の生きてきたことを全て否定されたような気持ちで、毎日の行いの一つ一つが「本当にこれでいいのだろうか。」と、何をするにも考えるようになりました。また、こんなに自分を否定されるようなら、学院に来なければ良かったと思うこともありました。それだけ私は、今まで自分勝手に好きなように生きてきたのです。

でも、この「生きてきた」ことを「生かされてきた」と思うと気持ちが楽になりました。

また、授業の中で「あなたたちに門は開かれました。」といわれたことを教室にいるみんなが一緒に来ていたと思うと、みんな仲間。これから一緒に悩んで、一緒に笑ってくれる仲間なんだと思えたとき、すごくうれしく思いました。

親子くらいの年の差はあっても、いろんなことを話し合える仲間が出来たんだと思うと本当にこの学院に来てよかったと、心の底からそう思えるようになりました。

を食べて、子どもたちには汚染されていないコメを与えたい」と語ります。小出さんは、俺は無宗教だと言っています。でも、すごい人ですね。科学者の良心を持っている人です。宮沢賢治が「世界全体が幸せにならなければ個人の幸せはあり得ない」と言っているけれども、私たちは自分さえよければいい、日本さえよければいいという考え方でしょう。

《月愛三昧》

阿闍世のために涅槃に入らない。そして説いたのが月愛三昧。お月さまが暗闇から照らしていくように、阿闍世の悩みを解いていこうと、そういう三昧に入るのです。そして一週間後に阿闍世はかさぶたが取れて救われていくというのが『涅槃経』に説かれているのです。伊蘭林といってものすごく異様なにおいを発する木があります。私たちの鼻をついて目がくらんでしまうような中に、栴檀樹という香木が一本出てきたら、そのにおいを消してしまうという例えがあります。

一人の人の目覚めによって全ての人を救っていく。「私はどうでもいいから、あなたを」ではなくて、「あなたは知らないけど、私はよく知っている」というのではなくて、私の救いが全ての人の救いにつながっていく。そういう世界が『涅槃経』に説かれています。

そんなことで今日は、『涅槃経』と『観経』の特徴の中で、『観経』は韋提希夫人が凡夫往生の道を歩んでいくことを通して衆生の救いを説いていきました。『涅槃経』は、阿闍世一人を救わねば私は涅槃に入らないということで、いろんな心の病を説いていかれた。

親鸞聖人は、特に『涅槃経』を「信の巻」にずっと引用しておられます。そのことは今日、具体的には述べませんでしたけれども、『教行信証』の中にある『涅槃経』だけでもいいですから読んでおいていただくといいと思います。

残り二年になりましたが、先生方、クラスのみんなに助けられながら悩み続けて生かされていきたいと思います。

移動研修・妙源寺柳堂にて（2014年9月6日）

『教行信証』入門⑤

「化身土巻」の開顕

平野　修

1．胎生の教示

今回は「方便化身土巻」を考えてみようと思います。

まず『教行信証』でこの巻が開かれる発端ですが、『大無量寿経』下巻に、

仏、阿難に告げたまわく、「汝、起ちて更に衣服を整え合掌恭敬して無量寿仏を礼したてまつるべし。（聖典七九頁）

と始まる一段があります。

釈尊が阿難に対して、姿勢を正して無量寿仏を礼すべしと言われる。阿難は無量寿仏を礼拝し、そして無量寿仏の世界を観察するということで展開する一段です。

その中で、釈尊が阿難に、「広い浄土の世界を行き来しているものと、花弁の額の中に閉じ込められているものと二種類の人があるのを見たか」と問われる。

そして「世尊、何の因、何の縁なれば、かの国の人民、胎生化生なる」（聖典八一頁）と、どういう理由で広い浄土の世界にいながら閉じ込められているのかという問いが出され、ここに「胎生」という問題が提起されます。親鸞の「方便化身土巻」は、ここから開かれることになります。

この「胎生」の「胎」という字は、サンスクリットのもとの言葉からすれば、花弁の額という意味で、閉じ込められている状態を表す言葉です。

阿弥陀仏の浄土に関わりを持っているわけです。ところが『大無量寿経』は、そういう仏の世界に関わりを持ちながら、

かの宮殿に生まれて寿五百歳、常に仏を見たてまつらず。このゆえにかの国土においてこれを胎生と謂う。（聖典八一頁）

と、五百年閉じ込められて、仏法僧の三宝に遇うことが出来ないものがい

る。それを「胎生」と指摘しています。

これはたいへん妙な話です。仏陀の世界へ行くために仏教の行を行じた。その結果、仏陀の世界へ行った。にもかかわらず、仏陀に遇えず、仏教と違うものとなってしまっている。

仏教に関わっていながら、その結果が仏教でなくなっているという状況は、我々のことで考えるとよく分かります。

我々はいろいろな仏事を勤めています。お寺、僧侶ということで仏教と係わり、仏の行を勤めている。けれども決して晴れやかな感じはしません。どこかで閉じ込められている。

するとどうも『大無量寿経』に説かれている「胎生」というあり方は、決して経典の中の話でなく、我々の現実のことだと考えられます。

『大無量寿経』のすごい点は、仏教に関わって、仏の証りが開かれるか開かれないかを問題にすればいいものを、仏教に関わっていって、仏教ではなくなっていくことが、仏教の中にあるということを見出した点なのです。

この『大無量寿経』の見出した問題点を最初に注目したのが、曇鸞大師の『略論安楽浄土義』という書物です。これはなにの略論かと言うと、世親の『浄土論』の略論です。

『浄土論』は『大無量寿経』の論ですが、その中にある胎生・化生については触れていない。けれども曇鸞は、『大無量寿経』を拝読し、『浄土論』を注釈する中、この胎生・化生が大切な問題であることに着目して『略論安楽浄土義』を制作なさった。その略論から親鸞もまた大きな示唆を与えられたわけです。

仏教を行じていながら、仏教でなくなっているという問題から「化身土巻」が展開しますが、親鸞にとって、それは具体的には、比叡山、あるいは奈良の仏教といった当時の仏教教団です。

出家の僧がいて、仏像を安置し、たくさんの経典が備えられている。仏法僧の三宝が整っているわけです。けれどもそのありさまは、『大無量寿経』に示されている胎生、仏教の行を行じながら、仏と遇えない、閉じ込められている、そういう胎生と言われる世界に他ならないではないかと。

この胎生の様子について、『大無量寿経』には「転輪聖王の王子の喩え」(聖典八二頁)が出てきます。

転輪聖王というのは、この世界で考えられる最も理想的な王のことですが、その王の子供たちが、何かの罪を犯して、王の怒りを買って牢獄に閉じ込められたと。その牢獄は七宝、つまり金、銀、瑠璃といった宝で出来上がっている。それだけならとても素晴らしいところだが、喩えでは、金の鎖で繋がれているというわけです。

この七宝とか金の鎖は、仏法を喩えているわけです。仏陀の法、仏陀の証りはまことに優れた、この上もないものです。けれどもその鎖で繋がれている。その中にありながら、そこに閉じ込められている。そのため本当の価値がわからない。ですから無上のものであっても無いに等しいわけです。

それでなぜそうなっていくかということについて、『大無量寿経』は「仏智疑惑」という問題を出します。それは仏陀の智慧を疑う。仏の智慧を疑って何を信じているかと言うと、自らの罪福の心を信じているからなのだと。こういうことで胎生の中身が示されます。

「罪福」という言葉の「罪」という字は、黒色、不吉なもの、邪悪なもの。「福」は白色、妙なるもの、快いもの、美しいものという意味です。

我々は不吉なもの、邪悪なものを退けて、妙なる、快いものを求めます。自らの役に立つもの、都合のいいものを求め、都合の悪いものを排除します。つまり罪と福を信ずる心です。それは広い意味で、我々の宗教心と言えます。

けれどもそういう心で仏教と関わった場合、その結果は仏教ではなくなっていく。それを胎生という言葉で表すわけです。そしてそれは別の言葉でいえば、「仏智疑惑」ということなのだと。

我々が仏教と関わる場合、大前提があります。仏様とは我々の要求に答えるもの、仏教は、我々の役に立つものだという前提です。

これは仏様というものを我々の方が決めていることになります。こういうのを「仏智疑惑」というわけです。

仏の名号にあらゆる功徳が収まっているとするのが浄土真宗です。けれども役に立つかどうかという我々の発想からすれば、どうしようもなくなったときに少しの慰めをもたらしてくれるぐらいにしか思えません。

それは仏様ということを我々がそういうふうに決めつけているからです。仏陀に対する見くびりがあります。

そういう仏陀の智慧を疑っていて、そのため罪福を信ずるというところに立って仏教と関わっていくならば、結果は仏教でなくなってしまうのだということを、『大無量寿経』で胎生・化生の問題として取り上げ、親鸞はその問題を、「化身土巻」で展開されるわけです。

「化身土巻」の最初に、仏教に関わりながら仏教でなくなっているという親鸞の問題意識が示されています。

しかるに濁世の群萌、穢悪の含識、いまし九十五種の邪道を出でて、半満・権実の法門に入るといえども、真なる者は、はなはだもって難く、実なる者は、はなはだもって希なり。偽なる者は、はなはだもって多く、虚なる者は、はなはだもって滋し。（聖典三一六頁）

「濁世の群萌、穢悪の含識」というのは、この世を生きる者のことです。それが釈尊の教化によって「九十五種の邪道を出る」ことができたと。

邪道というのは、人間の問題の解決を、人間の問題とせずに問題をそらして、他のものによって、解決していくような道。そういう道を出て、「半満・権実の法門」、これは仏教を表します。

「半満」とか「権実」というのは仏陀の教化を表します。いまだ十分な智恵・知識のないものに応じて、それを導くために半分説かれた。そして半分が理解できたら、後の半分を伝えて満足させるというので「半満」。「権実」も同様です。

そしてともかく仏教に入った。仏教に入ったならば、真実になっていいはずにもかかわらず、現実は「真なる者は、はなはだもって難く、実なる者は、はなはだもって希なり」と。

では邪道を出て、仏教に入って、真実にならないとするなら何者になっているのかというと、胎生になっているというわけです。

関わっているのは仏教だけれども、結果は仏教でなくなっている。そういうことが『大無量寿経』に胎生として示されている。これは何を言おうとしているのかと、親鸞は考えた。そして思い当った。

釈尊以降の仏教の流れは、いつのまにか胎生になっていく。胎生という方向に流れていく。あなたの求めているものは、仏教に似て仏教でなっていく、そういう教化のために胎生ということを示されたのだと、親鸞は了解されたかと思うのです。

胎生はだめだという意味ではない。我々の求めているその求め方、その内容というものは、胎生ではないかという仏陀の教化なのです。

あなたが仏教だと考えているものは胎生ではないか。それを翻して真実報土の往生を遂げよという、我々を教化するために、わざわざお立てになられた世界が胎生。

わざわざということが「方便」という意味になり、そして教化のために示された世界という意味で「化身土」という言葉を親鸞は使ったわけです。

『大無量寿経』において、仏陀が、釈尊以降の仏教の方向、流れを胎生ととらえ、その世界から翻るために胎生・化生という教説を示された。

そういう『大無量寿経』のこころによって、親鸞は、胎生の世界とは今日の仏教の姿そのもの、具体的には聖道門の仏教であり、その聖道門の仏教を翻して、浄土の門に帰せよということを言うために、この「方便化身土巻」を開かれた。

浄土の仏教に関係しているものだけに浄土の仏教が開かれているのではない。聖道門の仏教も、実に浄土の法門に帰すべくあるのだ。浄土の真宗というなかに、従来までの聖道門の仏教と言われるものも含まれているのだと言おうとされたわけです。

2. 三経の隠顕

『教行信証』の「信巻」と「化身土巻」には、それぞれにいわゆる「三・一問答」といわれる問答があります。正確には「信巻」は「三心一心問答」、「化身土巻」のそれは「三経隠顕問答」と言われます。

まず「信巻」では、世親の『願生偈』の「世尊我一心」の一心と、本願の至心・信楽・欲生の三心とはどんな関係にあるのかということが問答されます。

つまり世親にどうして「我一心」ということが起こったのかと。それは自分を信ずるということと関係があった。そして、そのことと本願の三心とは深い関係にあったということを明らかにするための問答です。

「化身土巻」では「信巻」のそれとは構成が違って、『観経』の三心と『大経』の三心とはどのような関係にあるのか。さらには『阿弥陀経』の一心とはどうなのかというふうに取り上げています。

これはどういう問答なのかというと、我々の仏教に関わる心は罪福の信、別の言葉でいえば、仏智を疑惑する心であって、そういう心であるなら、仏教を受け入れたつもりでも、結果は仏教でなくなってしまうということを申し上げてきましたが、要するにそれは信心の問題なのです。

仏教に関わるとか、仏教を受け止めるというのは、広い意味で信心、あるいは宗教心です。そういう我々の持っている信心、宗教心を考えていくうえで大きな示唆を与えてくれるものが、この「化身土巻」の問答になるかと思うのです。

親鸞は、我々の宗教を求める心はいかなる内容を持っているのかを明らか

にするわけですが、明らかにしてどうされたかと言うと、我々の心は仏智疑惑、罪福の信をもとにしていることが、すでに釈尊が『大無量寿経』で胎生として示されている。

けれどもそれは仏陀の教化であるから、そこを翻して仏陀の世界そのものに帰すことができるのだとして、この問答が立てられているわけです。それはとりもなおさず、伝統的な仏教の立場、考え方を翻すという意味にもなってきます。

親鸞は「化身土巻」で、『大無量寿経』、『観無量寿経』、『阿弥陀経』の三つの経典の関係を問題にしていきますが、『観経』について、釈尊以降の仏教の歴史を原理的に明らかにする経典であると了解されます。

釈尊以降の仏教は、出家が中心の仏教です。その出家者は仏教と関わって、釈尊のごとく、この身、この世において完全円満な証りを得ることが目標です。

「化身土巻」の標挙（聖典三二五頁）に「双樹林下往生」という言葉がありますが、双樹林下というのは釈尊の涅槃を表す言葉です。つまり釈尊は亡くなられた。しかしそれは単に亡くなったということではなく、完全円満なる証りを得て涅槃なされたという意味を持ちます。

ところが、そういう釈尊を目標として出家し修行に励んでも、努力や環境の問題がある。そしてさらに、寿命がきて道半ばで終わることも考えられる。これは出家者にとっては死活問題です。

よく知られている曇鸞大師のエピソードですが、曇鸞大師は仏教を求めるにあたり、求めるに先だって、まず不老長寿のために道教の道に入ったということが伝えられています。それは、仏教を求めても、道半ばで終わってしまっては、その歩みはどれほどの意味を持つのか、無駄に終わってしまうのではないかという問題です。

ところが『観経』には、この道半ばで終わるという問題に、臨終のときには仏が必ず迎えに来るという、臨終来迎ということが出てきます。

出家者は、仏と遇うことが目標なのですから、仏が来迎するということは、仏と遇うという仏道が完成したという意味を持つわけです。

そしてさらに『観経』は、釈迦のごとくに道を尋ねても達成できないという問題に対して、阿弥陀仏の浄土ということを出すわけです。それならまず阿弥陀仏の浄土に往生しなさいと。

なぜなら、浄土の衆生は無量寿であるから、釈迦の証りを求めようとして突き当たる寿命の問題がない。さらにその環境も、これ以上の環境はないということで阿弥陀仏の浄土に往生することが勧められます。

これは正像末という問題にかかわってきますが、その意味で『観経』は仏教の歴史に意味を与えます。もし阿弥陀仏の浄土ということがなかったならば、仏教はそれで終わりになるわけです。

かつて釈尊の時代は、道を求めて、求めたものが証りを得ることができた。ところが時とともに人々の修行に対する能力が下がり、環境もどんどん悪くなっていった。それが正像末の三時として表されてきた。

ですから末法というのは、釈尊以降の仏教の流れの当然の帰結なのです。末法のあとは滅法。滅法になれば、仏教という、この世を生きる唯一の光が全くなくなってしまう。

ところが当然の帰結として仏教が仏教でなくなっていくような状況の中にあっても、なお仏教というものが生きているという道を説いたものが、『大無量寿経』の念仏往生の仏道である。

末法と言われる時代であっても、あるいは滅法になったとしても、我々の上にこの世を生きる唯一の光となる仏道は成立することを説いたのが『大無量寿経』。

そして『観経』、『阿弥陀経』は、釈尊から遠く隔たった時代を生きて、求めれば絶望の中にあるものに、まず希望を与えるかたちで説かれた。

『阿弥陀経』は在家の者に、『観経』はおもに出家のものに向かって説かれますが、それはいかなる時代であり、どういう状況であっても、光となる仏道は成立しうるのだということを説示するため説かれた。

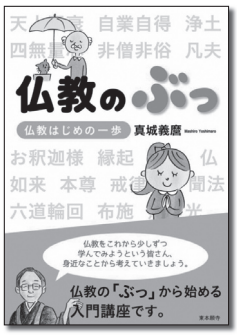
衆生は罪福の信、仏智疑惑の心をもって、仏教と関わろうとする。それで、その心の向かうところを指摘して、それは方便として釈尊が示された世界であって、そこからもう一度翻って、真実の世界、仏の世界に帰するということを言うために、親鸞はこの「方便化身土巻」を開かれたわけです。

（平成三年度　第五回講義　平成三年一二月二日）

本の紹介

●仏教のぶっ
―仏教はじめの一歩―

【目次】から　私たちは本当に幸せに向かっているのでしょうか？―お釈迦様／どうして人生を苦しいと感じるのでしょう―喜捨／不都合なことが消えると幸せになれるの？―碍／しがみつくからうまくいかない―中道／本当のことがわからないから不安―正見／〝縁起でもない〟ことなんかない―縁起／さまざまな仏様―仏・菩薩・明王・天／気づいたものの責任―仏と如来／ただ我れ独りにして尊し―唯我独尊／不具合だけ直してもうまくいかない―四聖諦〔ほか〕



真城義麿著（東本願寺出版部）
定価　一二〇〇円

●聞思の人⑤　安田理深集　上

一九八三年に発行された同書を改訂。ルビを付す等読みやすくなった。教学研究所の機関誌『教化研究』所載の講演録及び執筆原稿より抜粋・編纂。唯識をはじめとした仏教の深い学びから語られる講義、キリスト教の神学者との鼎談などを収載。「仏の世界を万人に公開する法が念仏である」など、安田先生の有名なことばにであえる。

教学研究所編（東本願寺出版部）
定価　一五〇〇円

●法話ＣＤ「本願に生きた念仏者」⑫
汝、起ちて更に衣服を整うべし

宗門の近代の真宗教学の礎を築いた諸師の法話ＣＤ第十二弾は、二〇〇五年五月二十日に真宗本廟阿弥陀堂で行われた「宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌真宗本廟お待ち受け大会」での宮城顗氏の記念講演を収録しています。

宮城氏は、法話ＣＤの中で『大経』に説かれる「汝、起ちて更に衣服を整うべし」の言葉をたよりに、答えをもって物事を考える私たちに、自身の問いに起てと呼びかけ、問いから始めることの大切さを語られています。特典として、氏の直筆の書画をもとにした「しおり」を封入しております。

宮城顗講演（東本願寺出版部）
定価　一八〇〇円

編集後記

女子ワールドカップ・カナダ大会（二〇一五年）では、なでしこジャパンは準優勝だった。ある国からは「運の良さ」が指摘されていたが、本当にそうだろうか。サッカーに限らず、勝敗は試合時間内に限られるものではなく、それまでの一人ひとりのコンディションやチームワークなど、日常の一瞬一瞬の過ごし方が左右するのだと思う。

さて、中村薫先生より「宿業と運命―『涅槃経』と『観経』から」と題して特別講義をいただいた。先生は講義の中で「諦めて放棄してしまうのが宿業ではなくて、宿業は、どこまでも受け止めていくものです」と仰った。

『涅槃経』に説かれる阿闍世は、罪の自覚によって、自らの過ちを宿業として受け止め仏弟子としての歩みを始めた。それに対して、『観経』で説かれる韋提希は、最後まで自分の運命を歎き愚痴ばかり言って、自らの行為を省みることはなかった。彼女は本当に救われたのだろうか。

今回のなでしこジャパンは、運が善いか悪いかといって、運命に左右された結果ではないはずだ。前回の優勝から紆余曲折を経て、自他ともに修正すべき点を反省しながら、今ここですべきことを積み重ねてきた彼女たちの結果が準優勝だったように思う。

宮間キャプテンが言った。「女子サッカーを単なるブームではなく文化にしたい」と。本来、撫子（なでしこ）の花言葉「純なる愛」を説く仏教は日本の文化そのもの。そして、教師と名告る私たち一人ひとりが、阿弥陀の「純なる愛」に目覚めるとき、今ここですべき一つひとつのことを宿業として受け止めてゆける尊い歩みをたまわるのだろう。「純なる愛」に救われた阿闍世の足跡を辿りながら、また「純なる愛」に導かれ救われようとしている韋提希と共に…

（大窪康充）